

最終回
最後のひとかけら



東京は午前一時である。

当然のことながら、毎日、午前一時はやってきて、さて、幾たび繰り返されたのか、季節が二つ三つと過ぎて、それでもまた午前一時はやってきた。

東京は銀座の路地裏である。とりわけ、そのあたりは迷路のように細かい路地が入り組んでいる。栄子えいこは〈M〉と一文字だけ掲げたバーのドアを押し、体を小さくして中を覗のぞいてみた。あらかじめ聞いてはいたが、小ぢんまりとしたカウンターだけのバーで、外観は古びているものの、中の内装はいかにも真新しく感じられた。

「いらっしやい——シュツ——ませ」
カウンターの前に立っていたのは前田まへだだった。しかし、栄子は前田のことを何も知らない。

栄子にしてみれば、どの店でもよかったのである。

(もし、)と栄子は何度も自分に確かめてきた。

(もし、無事に「11人のマリア」が公開されたら、一人で大人のバーに行つて乾杯をしよう)(一人で乾杯をして、亡くなった祖母に「ありがとう」つて云うんだ)

その日がやってきた。

ただ、栄子は東京の「大人のバー」など知るはずもなく、たまたま映画のプロモーションで銀座に出向いたとき、スタッフの何人かが、「〈M〉に行きましたか?」「ああ、前田さんのバーだよね」と話しているのが耳に入った。

「とっても、いいバーですよ」

スタッフの一人が「一度、行つたらいい」と後輩スタッフに〈M〉への行き方を伝授しているのを、栄子はすぐに覚えた。今度の映画で、栄子は他の十人より長い台詞せりふがいくつかあり、そのおかげで、入り組んだ言葉の連なりを覚えるコツを習得していたのだ。

「何を——シュッ——おつくりしましょう」

「あの」と栄子はメニューを見てもどうせわから

ないので、「コーラを使った飲みものってあるんでしようか」と率直に訊いてみた。できれば、祖母が最後に飲みたがったというコーラで乾杯をしたい。

「もちろん、ございますよ」

前田は小道具倉庫でミツキが口にした言葉をよく覚えていた。いや、覚えているどころか、そのときのミツキの言葉に背中を押されて、バーテンドーに戻る道を選んだのである。ちようどよく、廃業の決まったバーが見つかったことと、思いがけない援助金が映画会社から出たことも手伝っていたが、いちばん大きかったのは、「前田さんみたいなロマンス・グレーのバーテンさんにお酒をつくっていただくのが最高」というミツキの言葉だった。「わたしなら、毎日通っちゃいます」と彼女がそう云うのを聞いて迷いがふっきれた。

「コークハイは——シュツ——いかがでしょうか」

奇しくも、それはあの地震の夜にミツキのためにひさしぶりにつくった酒だった。

「はい。それをお願いします」

栄子はコークハイがどんな飲みものであるかま
ったく知らない。もちろん飲んだことはなかった。
まだ二十歳になったばかりで、バーという場所に
来ること自体、経験がなかった。

時間が深かったせいもあって、栄子の他に客は
一人もいなかった。貸し切りである。前田は見知
らぬ若い女性を前にし、ミツキの「毎日通っちゃ
います」を胸のうちに反芻はんすうしながら、心をこめて
コークハイをつくった。倉庫番をしていたときは
あんなにも猫背になっていたのに、不思議とタイ
を結んでカウンターの中に立つと、自分でもどう
なっているのかと思うほど、若いときのように背
筋が伸びた。

とびきり冷たいコークハイだった。兎とにも角かくに
も、冷たく仕上げることが前田のこだわりで、小
ぶりのグラスに充みたされたそれがカウンターテー
ブルの上に置かれると、炭酸と冷気がひとつにな
って、グラスのまわりに細かい霧のようなものが
漂った。

「どうぞ」

前田は声になるかならないかという微かすかな声で栄子を促した。栄子は胸もとにあてがっていた右手をグラスに差し出し、指先がグラスに触れた瞬間、その冷たさに打たれて、一瞬、手を引つ込めた。

きわめて黒に近い琥珀色こはくの飲みものは、三日月型にカットされたレモンを乗せている――。

その爽さわやかな香りに誘われ、栄子はグラスを手もとに引き寄せて口に運んだ。冷たいグラスのふちに唇をつけ、まずは少しだけ飲んでみる。と、酒を飲んでいるというより、深夜の誰もいない静かなバーの時間そのものを口に含んだような心地になった。

「おいしい」と無意識に声が出て、喉のどの奥から東京の夜が自分に染み込んでくるのを、わけもなく嬉うれしく思った。

*

そのちょうど同じ頃合いに、片時町かたときちやうの（よつかど）のカウンター席でミツキと浩一こういちが定食を食べていた。浩一が（よつかど）に来るのはそれが初めてで、ミツキにしても、まだ二度目だった。

「いいでしょう、この食堂」

ミツキは、しかし常連客のように振る舞い、カウンター席から調理場で働いている食堂の女たちを間近に見ていると、それだけで気持ちが悪く落ちて着いてきて、（ああ、生きてる）と云いたくなくなった。

「この店、松井まついさんに教えてもらったの」

「——あ、タクシーの運転手さんの」

浩一は以前、たしか「松井」の名をミツキから聞いたことがあったはず、と記憶の底からすく上げた。

「そう。（ブラックボード）の松井さん。夜だけ走ってるタクシー。わたし、松井さんにどれだけ助けてもらったかわからない。でも、この食堂をついこないだまで教えてくれなかったの。それは、ちよつと許せない。ていうか、わたしには秘密にしていたのに、可奈子かなこさんには教えていたってい

うのが、もっと許せない」

「昨日も来てましたよ」

カウンターの中からアヤノが楽しげにミツキに声をかけた。

「松井さんと可奈子さん。仲良くしてました」

「カナコさん？」と浩一はやはりその名を記憶の中に探してみたが、すぐには見つからなかった。

「あ、ほら、あのときの」

ミツキは食べかけた唐揚げを皿に戻して云った。

「あの夜の——びわ泥棒の」

「ああ、びわ泥棒の可奈子さんですか」

浩一は記憶をとり戻して大きく頷いた。うなず

「びわ泥棒？」と今度はアヤノが「なんのことです？」とミツキに尋ねる。が、「話せば長くなるの」とミツキは唐揚げをかじり、「とにかく、それがきっかけで二人は出会って、歳としもそれなりに離れていると思うんだけど、すっかり意気投合して——」

「びわ泥棒がきっかけで？」

「というか、二人にはそれぞれ探している人がい

てね」

そこでミツキは「ね？」とアヤノの方を見て意味ありげな目くばせをしてみせた。「それもやっぱり話せば長くなるんだけど、たまたま有名な探偵さんと知り合って——ね？」ともういちどアヤノの顔色をうかがう。「その探偵さんに依頼してみたらどうだろうかってことになったんだけど——そういえば、それってどうなったんですたっけ」

「うん」とアヤノは洗いもので濡れた手を布巾ふきんでぬぐい、「それがね」と声をひそめて話し始めた。

*

「いや」とシユロは首を横に振ってすぐに否定したのだった。「僕は松井さんから可奈子さんからも、人探しの依頼は受けてないけれど——」

「あれ、そうなんだ？」

アヤノはカウンターごしにシユロと言葉を交わすうち、（こんなことになるなんて）とあらため

て縁のつながりの不思議に胸の奥がしんとなった。シュロは〈よつかど〉にたびたびやって来てはハムエッグ定食をいかにもおいしそうに食べて帰る。アヤノはまさかこうした時間がふたたび巡ってくるとは思っていなかったもので、つながりの要となった松井さんと可奈子さんに最大級の感謝の思いを抱くと同時に、二人の「人探し」がどうなったのかと気になっていた。

「わたしが知っている限りのことを云うと、たしか松井さんは、以前、お客さんとして乗せた女のひとに一目惚れひとめぼれをして、まあ、はっきりそうとは云わないんだけど、たぶん、昔の恋人に似ているとかそういうことじゃないかと思われて。もういちど会いたいって、最初は可奈子さんにもそう話してた」

「なるほど」とシュロは定食を食べ終え、やかんの中のほうじ茶を手もとの湯呑ゆづみに注ぎ足して飲んだ。

「で、可奈子さんの方はね、十二年前——だったかな？ 家を出て行ったきりの弟さんがいるとか

で、やっぱり、もういちど会いたいって。だから、まずはその、もういちど会いたっていう思いで二人は意気投合してたの」

「なるほどね」とシユロはお茶を飲みながら何度か頷いていた。「それはたぶんあれですよ、意気投合したことで、二人の思いに変化が起きたんでしょう」

「変化？」

「そう。特に松井さんの方はきわめて単純な話で、ようするに可奈子さんと出会ったことで、その幻の女性を探す必要がなくなったわけです」

「ああ。そういうことか」

「で、可奈子さんの方ですが、じつを云うと、可奈子さんの弟さんについては、ひとつ思い当たることがあって——」

「え？」

「居場所を知っているかもしれないんです——」

「そうなの？」

「いや、可奈子さんから直接、話を聞いてみないと本当のところはわからないんだけど——なにし

ろ、僕はこの食堂で二度ばかりすれ違ふようにしてご挨拶あいさつしただけですし——でも、そのとき可奈子さんがご自分のお仕事について話してくれたので、それで僕も一応、探偵をやってます、と明かしたついでに、もし、何かお困りのことがありましたら、と鎌かまをかけてみたわけです」

「さすが、名探偵」とアヤノの隣でこっそり話を聞いていたキサが思わず声をあげた。「彼女に何かお困りのことがあると見抜いたわけね」

「いや、そうじゃないんです。ここへ通っていれば、皆さんがそうして話しているのが耳に入ってくるし、ときには、ひそひそ話しているのも聞かえて、そうした話をジグソーパズルのように組み上げていったら、どうもそういうことなのかな、と。弟さんが家出をして、すでにもう十年以上が過ぎて——」

「その弟さんのことを知ってるの？」

「いや、もしかするとです。もしかして、僕は自分のポケットの中にジグソーパズルの最後のひとかけらを隠し持っているかもしれない、といまさ

らのように気づいたんです」

*

シユロがなぜ「名探偵」の呼び声をほしのままにしているかと云えば、それはひとえに、持ち前の優れた直感が功を奏しているからだった。

直感というのは、シユロ本人に云わせれば、じつのところ何かと何かがつながっていることに気づくことで、自分の特殊な能力が発揮されているわけではないという。

あれからじつにおよそ一年に近い時間が経過していたが、東京のはずれのT町へ父親の出演した映画を観みに行き、その映画館で出会った青年——いや、暗がりくまがりで青年に見えた彼は、その実、三十六歳の冬木蓮ふゆきれんと名乗る男だったのだが、その彼と可奈子さんが探している弟さんとがシユロの中でぴたりと重なり合った。

(もういちど会いたい)

そうつぶやいたのは、松井でも可奈子でもなく、

じつに探偵の方だったのである。

というのも、そこにもそれなりの理由があり、一年の時を経たいまになって、ふたたびその映画館がシユロの父親が出演したきわめてマイナーな映画を二本も並べて上映しているという情報を得た。もちろん映画も観たかったのだが、今回の企画がはたして彼によるものなのか、そのところを本人に訊いてみたかった。なにせ、彼はアルバイトの身なのだから――。

ところが、実際に彼に会いに行つて、まずは近況報告を交わしていると、驚いたことに、彼はいつものまにかアルバイトから一気に館長に昇進していたのだった。客が減りつづける一方の小屋を前の館長が見切りをつけて逃げ出した――というのが本当のところなのだが、館長を受け継いだ彼は、「自分の観たい映画でプログラムを組む」という暴挙に出て、これが予想外の集客につながって経営難を乗り越ええたらしい。

「それで、今回のような二本立ても実現したわけです」

シユロは彼がその容姿まで館長らしくなっていることを頼もしく感じていた。それならば、とすかさず探偵の物腰になる。

「じつを云うと、今日は父の映画を観に来ただけではなく、あなたにひとつ、おうかがいしたいことがあるまして——このあいだ、お話しされていたお姉さんのことです」

「姉の？」

「ええ。冬木可奈子さん——ですよね」

「はい。そうですか——姉が何か？」

「笑うと、右の頬ほおにえくぼが出来ます？」

「ええ。子供のころからそうでした」

「やはりそうですか。僕の知るところでは、お姉さんはいま、〈東京03相談室〉という電話相談のオペレーターをなさっていて、毎日、たくさんの人たちの様々な質問にこたえていらつしやいます——」

「そうなんですか——」

「ええ。しかし、お姉さん自身にも、誰にも云えない相談事がありました——それがつまり、十二

年前に姿を消した弟さんにもういちど会いたい、
ということなんです」

「ぼくにですか」

「そうです。いや、そうだったんです。これは十二年という歳月の長さによるものなのか、それとも、何か心境に変化があったのか、そのところはわからないんですが、どうも最近になって、あなたに会いたい、という思いが後退してしまったようなんです。これはあくまで僕の推測ですが、どうやら、お姉さんは悟られたのではないでしょうか。つまり、このあいだ、あなたが話していた、あなたの思いをです」

「姉がですか」

「そうです」

「本当に？」

そう云って、館長となった彼は言葉を切り、それからしばらく沈黙して、ようやく「なんといいか」と声を絞り出した。

「なんといいか、なんとも嬉しいような寂しいような——」

そう云って、また口をつぐんで静かに目を閉じ、
「正しい言葉になりませんね——」
と小さく首を横に振った。

*

シユロの話のひとつとおりアヤノから聞き終え、
浩一はひとつ息をついて静かに箸はしを置いた。

「じゃあ、可奈子さんは弟さんがT町の映画館の
館長になっていることは知らないんですね」

「そういうことなの」

アヤノがそう云ったとき、食堂から北西の方角
に八キロほど離れたアパートの一室で、可奈子が
くしゃみをしていた。

そういえば、ついこのあいだ、「くしゃみが止
まらないのですが、誰か僕の噂うわさをしているのでし
ょうか」という無邪気な相談を受けたばかり、と
可奈子は思い出した。

「それは、おそらく風邪かぜをひいてしまったのでは
ないでしょうか」とお答えしたが、しかし、どう

してくしゃみが出ると、どこかで誰かが自分の噂をしていると云うようになったのだろう——可奈子としても誰かに電話で教えてもらいたかった。

可奈子はアパートの部屋の鏡に自分の姿を映し、
(さあ、今夜です)

と自分に向かって声をかけた。

本日は仕事が休みで、ちょうどいい具合に雲が夜空を覆って月を隠している。クリーニングから戻ってきた黒いコートをうやうや恭しく羽織り、中は黒いセーターで、さらに黒い帽子を目深にかぶ被った。

一年ぶりだ——。

コートの裾をひるがえし、可奈子はさつそう颯爽と部屋を出た。

あれから一年。ということとは、松井と出会ってから一年ということになる。

(もう、そんなに?) (歳をとるほど時間が過ぎていくのが早くなる) (だって、このびわ泥棒だって、今年でもう十三年目?) (そろそろ、やめようか) (やめてもいいんじゃない?) (この歳で、びわの木によじ登るのは、正直きついもの)

可奈子はアパートを出て、まっすぐバス通りまで歩いた。月も星も見えない寂しい夜であるが意気込みは充分で、(きつい) と思いつながら、胸をおどらせて横断歩道を足早に渡った。

街灯に照らされたびわの木を見上げる。

「よし」と声が出た。オレンジ色の実が見える。植物は本当に偉い。毎年、しっかりと文字通りの「結果」を見せてくれる。

「さて」と自分を奮い立たせるために大きな声を出した途端、オレンジ色は何やら黒々としたものに隠れて見えなくなった。

なんだろう？

何か黒々としたもの——カラスだろうか——がオレンジ色の実をパクリとやったかのように感じられた。

いや、ちょっと待って。いくらなんでもあんなに大きなカラスがいるはずがない。

「もしもし」と声をかけた。

すると、「え？」と返ってきた声に聞き覚えがあった。カラスではなく人間の男の声だ。それも、

とてもよく知っている声である。

「誰？」と見上げながら問いかけると、

「びわ泥棒です」と——聞き間違いのような弟の
声が返ってきた。

*

そのとき、食堂から八キロ離れたところでそんなことが起きていたことをミツキはまだ知らない。

いずれ食堂に通ううち、噂が耳に入り、「へえ、そんなことがあったんだ」と驚くことになるが、それはまだ少し先の話である。

少し先だが、ミツキはそうした話を耳にするたび、皆はいつのまにか前へ進んでいるのに、自分は（相変わらずだな）と力なく苦笑するしかなかった。

何も変わらない。変わろうとしない。変わるチャンスをことごとく見逃している。いつも相変わらず、相変わらず——。

ミツキにとって、「相変わらず」という言葉は

ふたつの意味を持っていた。ひとつはその健在ぶりに「変わらなくてよかった」という意味合いで使い、もうひとつは、相も変わらずナントカのひとつ覚えのように変わりばえのしない自分に嘆いて自らを罵る^{ののし}。

「ごちそうさまでした」

食堂を出ると、ミツキと浩一は黙ったまま星も月もない空を見上げていた。しばらくそうしていたが、ふと浩一が、

「どちらに？」

と十字路の端に立って風を読むように目を閉じた。

「どちらへでも」とミツキは小さな声で答える。

浩一はミツキの声の弱さに気づいたのだろうか。突然、声を張り上げておかしな唄^{うた}を歌い始めた。

「何それ、なんの唄？」

ミツキは歌詞もメロディーも聞いたことのないデタラメな唄になぜか耳を傾け、（あれ？ もしかして）と思う。

（浩一君が歌うのを初めて聞いたかも）

——おはよう、東京。もうじき朝ですよ。

そう歌っているようだった。

「何なの、その唄」

「いや、朝刊を配るときに、ときどき歌うんだけど——」

「だから、何なのよ、それ」

ミツキが繰り返し非難しても、繰り返し浩一は歌いつづけ、そのうちミツキも一緒になってデタラメに歌い始めた。

いつのまにか二人で歌っていた。

歌いながら、さて、どこへ向かうでもなく歩き始めていた。

*

——おはよう、東京。もうじき朝ですよ。

しかし、朝はいずれ昼となって夕方になって夜になり、東京の空の下の食堂とバーと古道具屋と撮影所と電話相談室に青白い月の光を降りそそぐ。

もちろん、松井が運転する夜空の色をしたタク

シーの後部座席にもいつもの夜がやってきて、

「もう、絶対無理」

ミツキは相変わらず弱音を吐いていた。

「絶対無理。こんな夜中に、羊の毛刈り鉋ばさみなんて

見つかるはずない」

「いえ、まだあきらめるのは早いですよ」と松井がなだめたが、「今回ばかりは絶対無理です」とミツキは譲らない。

「いえ、大丈夫です」と松井も負けていなかった。「いつだって、何とかなかったじゃないですか。そうだ、あのおかしな古道具屋へ行ってみましょう。あそこなら——」

そう云いながら松井はバックミラーに映るミツキの様子をうかがっていた。相変わらず、左手の薬指から微動だにしなくなった銀色の指輪をもてあそんでいる。何の意識もなく、無自覚に右の指先が指輪の表面をなぞっていた。

とそのとき、「あつ」とミツキが小さく声をあげたように思い、松井が目をこらすと、ミラーの中のミツキは困惑と驚きが入り混じった複雑な表

情をしていた。視線は自分の手もとを捉とらえている。松井は前方の安全を確かめてから、いま一度、バックミラーを覗き込んだ。

「もしかして、はずれるかも」

そうつぶやいたミツキの右手の指先に、その言葉通り、左手の薬指から抜け落ちかけた銀色の指輪があった。窓の外の街灯を反射して、ごく控えめに輝いている。

「あっ」とまた声が出て、

「はずれた」

まるで何事もなかったかのように指輪はするりと抜け、ほんの一瞬の間があつて、ミツキはそれをあわてて元に戻した。